

## 創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫（報告3）

# 「子どもと表現Ⅰ」におけるマザーグースの活用効果

Using "Mother Goose" as a text for "Child and Expression I"  
An Approach to Encourage Creativity for the Students of Early Childhood Education (Report 3)

吉 田 若 葉

本稿は、筆者の研究テーマである「創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫」の報告第3稿として、「子どもと表現Ⅰ」におけるマザーグース（25の唄）を活用した授業の効果を検証している。谷川俊太郎訳詩のマザーグースと楽譜と音楽（CD）に加え、洋書や解説書など130点ばかりのマザーグースの本を教材としている。本稿では、先ず教材の有効性について考察した。谷川俊太郎のマザーグースは、体ぐるみで遊べる「口にすると楽しくて耳で聞いても楽しい唄」であり「言葉と絵と音楽で織りなす唄」である。「人間のリアリティをもち不思議でナンセンスな唄」はマザーグースがもつ独特の魅力を感じさせ、自由奔放な空想の世界を引き出してくれる。「表情豊かで多様性をもった音楽」は聴く人の感性に心地よく響き解放と共感をもたらす。また、「多彩なイラストで表現されている唄」は幅広く奥深いマザーグースの表現の多様性を感じさせる。このような魅力ある教材を活用することで、学生たちは、想像する楽しさと表現の多様性を感じマザーグースの面白さを実感していく。この学びが、多様な子どもの表現を受けとめ、子どもの表現に共感できる保育者を育てていくのである。

### 1. はじめに

本稿は、創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫の報告第3稿として、保育学科1年生前期科目「子どもと表現Ⅰ」におけるマザーグースを活用した授業内容に関して述べるものである。筆者が保育現場でマザーグースを活用しはじめたのは25年以上も前になるが、その実践事例の一部は、1998年に『保育学研究』第36巻第1号に紹介した。科目「子どもと表現Ⅰ」において学生を対象としてマザーグースを導入したのは、2000年度からである。本稿では、教材としてのマザーグースの魅力とその有効性を探り、2006年度のマザーグースを活用した授業の展開と授業を体験した学生のレポートから学生の学習成果を考察し、マザーグースを活用した授業の効果を検証していくことを研究目的とする。

### 2. 教材としてのマザーグース

英語圏で親しまれている伝承童謡をナーサリー・ライムといたりマザー・グースの唄といたり、単にマザーグースといたりするが、その歴史は、イギリスから誕生している。唄の起源も唄の総数も明らかではないが、800以上の唄があり、古いものは何百年もの間唄い継がれてき

た。イギリスの童謡について平野は「イギリスの童謡は、資料収集という文献面でも学問研究の対象としても、他国の伝承童謡と比べものにならないほど確固とした基盤をもつにいたっている。」<sup>1)</sup>と述べている。イギリスの出版文化の発達によって18世紀以降数多くの本が出版され、子どもにも大人にも親しまれる文化として広く定着してきた。日本においても、最近ではマザーグースに関する数多くの日本語訳の本や研究書が出版されるようになり、マザーグースへの関心が広がってきている。筆者が教材として用いているマザーグースは、原詩の英語ではなく、谷川俊太郎訳詩とそれをもとにレコーディングされた音楽のマザーグースの、ほんの一部である。本項では、谷川俊太郎訳のマザーグースを、教材としての側面から捉えその有効性について考察していく。

## 2. (1) 谷川俊太郎のマザーグース

詩人谷川俊太郎は、マザーグースの翻訳の代表者として定評がある。谷川は、1975年に『マザー・グースのうた』を堀内誠一のイラストで出版して以来、次々とマザーグースを翻訳している。初版の『マザー・グースのうた』のあとがきで谷川は<sup>2)</sup>、マザー・グースの訳詩は、日本語による作品というよりも、谷川が解釈した谷川のマザー・グースであると記している。谷川は、谷川俊太郎のマザーグースについて次のように述べている。「日本語を話す私たちには、英語のままのマザー・グースにはおいそれとなじめません。もとのマザー・グースとは、音やひびきやかかくされた意味がずいぶんちがってくると知りながら、私がマザー・グースを訳したのは、たとえば言葉はちがっても、なお日本人である私たちにも伝わるものがあると信じたからです。」<sup>3)</sup>

次に、谷川自身やイラストレーターの堀内が語っている言葉も引用して、谷川俊太郎のマザーグースの魅力を探してみたい。

### 2. (1) 1) 「口にすると楽しくて耳で聞いても楽しい」唄

谷川俊太郎訳のマザーグースを教材としている第一の理由は、詩が「心にすっと入ってくる」ことである。「心にすっと入ってくる」ことについて、谷川の言葉から考えてみたい。

韻をふんでいるマザーグースの唄を訳すにあたって谷川は<sup>4)</sup>、韻をふむことによって荒唐無稽な話がなんとなくスッキリ腑におちてしまうものも多いが、それを日本語にするには無理が出てくるので、「よく意味がわからないけどきれいだね」というものにするために日本人にとって一番ピンとくる「七五調」及びその周辺のリズムで訳すことを原則としている。このように言葉のニュアンスや言葉のリズムに対する心遣い故に、谷川俊太郎のマザーグースが、うたう人の心にすっと入ってくるのであろう。

大町は谷川の訳について、「じつに生き生きとしている用語、常に訳詩に伴うギクシャクとした感じが全くなく、魅力的な名訳だと思う。」<sup>5)</sup>と語っている。

また谷川は、マザーグースを子どものためのわらべうたとして感じとってほしいと次のように語っている。「わらべうたは地域や言語によって違いがあるけれど、世界的に共通したものがあって、それは体ぐるみで遊ぶことで、言葉の無意識の部分をも身につけることだと思う。「口にすると楽しくて、耳で聞いても楽しい」というのを小さい頃から学ぶことがすごく大事なことだと思う。」<sup>6)</sup> 谷川俊太郎のマザーグースが、「口にすると楽しくて、耳で聞いても楽しい」からこそ、

子どもたちに受け入れられ楽しい教材として活用できると考える。

## 2. (1) 2) 詩と絵と音楽で織りなす唄

谷川俊太郎のマザー・グースは、1975年の初版に続いて第5集まで出版され、1976年にはキングレコードからボニージャックス企画の『谷川俊太郎訳詩によるマザー・グースのうた』のLPレコード(1995年にCDとして発売)が、1977年にはマザー・グースのうた別巻『マザー・グースのうたのほん』(若松庄司編曲の楽譜)が出版された。詩と絵と音楽で織りなされたマザーグースが誕生したのである。このように詩と絵と音楽によって豊かに表現されているところが、谷川俊太郎のマザーグースを教材として活用している第二の理由である。

詩をとなえて言葉のリズムを楽しみ、挿絵を見てイメージを膨らませ、曲を聴いて歌いながら踊り、子どもたちは体ぐるみでマザーグースと遊ぶ。谷川はレコードの解説の中で、「本のかたちでそれらを読んでいただくのに加えて、こうしてレコードでそれらを聴いていただけることになったのは、マザー・グースの本来の姿に一步でも近づけたような気がして嬉しく思います。」<sup>4)</sup>と述べている。音楽としてのマザーグースも楽しむことができるのである。レコーディングの音楽監督の大町は<sup>7)</sup>、古くから伝わるマザーグースのメロディーに訳詩をあてはめる作業は困難を極めたが、フレーズを繰り返したり多少の用語を変えて、驚くほど自然に歌詞割りができたと語っている。歌の歌詞割りがいかに重要であるかをうかがい知ることができる。用いている教材は確かに自然な感じで心にすっと入ってきて楽しむことができる音楽である。

平野はCDの解説で、マザーグースの唄は自然に伝承されたものであるから「肩ひじはって立ち向かうことはないので、気楽に唄をきいたり、自分で歌ったり、絵本をながめたり、あるいは読んでもらったりして楽しめばいいのだと思います。」<sup>8)</sup>とマザーグースの楽しみ方を提案している。この平野の提案は、子どもたちのマザーグースを楽しむ姿として、あるいは学生がマザーグースに親しんで関心を深めていく過程として自然なかたちで実践されており、ここに教材としての有効性が示されている。

## 2. (2) 感性に響くマザーグース

「表現」の領域は、豊かな感性を育て表現する意欲を養い創造性を豊かにする観点から示されている。「感性」とは、広辞苑によれば、①外界の刺激に応じて感覚・知覚を生ずる感覚器官の感受性。②感覚によってよび起こされ、それに支配される体験内容。従って、感覚に伴う感情や衝動・欲望をも含む。③理性・意志によって制御されるべき感覚的欲望。④思惟の素材となる感覚的認識。とある。表現が感性にかかわる領域であるならば、表現の領域で用いる教材は当然豊かな感性を育むものでなければならない。2. (2) では、マザーグースと感性についての考察をおこなっていく。

### 2. (2) 1) 表情豊かで多様性をもった音楽

『谷川俊太郎訳詩によるマザー・グースのうた』のLPレコードは、後に3枚のCDとして発売されたが、ボニージャックス企画の曲は、演奏の音色とハーモニーが美しい。それに加え打楽器

## 吉 田 若 葉

がスパイス的な効果を発揮していて、リズムカルで面白く楽しい気分で聴くことができる。また、歌手の歌声が表情豊かで心温まる雰囲気を感じられ聴く人の感性と心地よく響きあう。大町は<sup>7)</sup>、レコーディングの際にマザーグースの性質を考慮し内容に多様性をもたせたいと考え、大勢の編曲者と歌手と演奏者の協力を得たと述べている。子どもたちはマザーグースの音楽に飽きることなく楽しんでいるが、それは大町の多様性に対する配慮によるのかもしれない。そして、いつの間にか聴く者の感性に心地よく響いていくのである。

先に本稿2.(1)2)で述べた別巻『マザー・グースのうたのほん』は、『マザー・グースのうた』をもとにレコーディングされたLPレコードを吹き込む際の楽譜資料を改めてまとめたものである。この曲集を編集した大町は、「マザーグースとは何か、このことをひと言で説明するのはとても難しい問題です。この曲集によって感覚的に理解していただければと思います。」<sup>9)</sup>と、感性に訴える音楽としてのマザーグースであることを語っている。

また、大町は<sup>9)</sup>、マザーグースのうたには、一つの詩に何種類ものメロディーがついているものもあるが、この曲集では、大町の主観で、最も美しく、おもしろく、ポピュラーだと思われるものを採用したこと、そして歌詞は楽譜にあまりこだわらずに自由に歌ってもよいと述べている。口伝のマザーグースの性質を大切に、大町が解釈した大町のマザーグースを表現した曲集ということがいえる。

## 2. (2) 2) 人間のリアリティをもつ唄

英語圏では新聞にマザーグースが引用されない日はないといわれるほど、マザーグースは人々の生活に入り込んでいるようである。井田は<sup>10)</sup>、人々の話題のバックグラウンドにしよつちゅう出てくるマザーグースを「お惣菜文学」と称している。また谷川は、マザーグースが日本の「ことわざ」のような人間のリアリティを持っていると語り、「子どもにはきれいでかわいいものを与えようとするんじゃなくて、子どもの現実も大人の現実も同じ現実なんだと思う。その意識が現実から目をそらさないわらべうたを伝え続け、そのうたを子どもの頃から聞くことでその意識が自然に植えつけられていく。つまりマザー・グースは英語国民の魂の一番深いところ、感受性のすごい深いところを形成しているんじゃないかという気がします。」<sup>11)</sup>と人々の生活の中に入り込んで脈々と伝えられているマザーグースの生命力について語っている。

人間のリアリティは、日本語訳の谷川のマザーグースにも、十分に表現されている。いわゆる日本の子どもの歌にはみられないマザーグース独特の世界が表現されている。美しくリズムカルで楽しいメロディーなのに、きれいでかわいいだけの歌詞ではない。子どもにとっては、身近な現実であるようなないような不思議な歌詞が多い。そんな人間のリアリティをもつ唄を、子どもは大好きで、屈託なく素直に楽しんで歌っている。人間くさいマザーグースの世界の魅力を子どもたちなりに感じとっているのかもしれない。

## 2. (2) 3) 多彩なイラストが語る唄

マザーグースが今日まで多くの人々に愛されてきた理由のひとつに、たくさんの画家によって描かれて、絵本として親しまれてきたことがあげられる。吉田は、イラストによって解釈の多様

性を楽しめるマザーグースの魅力を次のように語っている。

「マザーグースの唄の解釈は無限と言っても過言でないほど、多様にできます。マザーグースの唄の絵本や挿絵は、画家それぞれの解釈が出ていて、そういう目で絵を見るととても楽しく読めます。英語圏で出た絵本や挿絵を見ていると、こんなふうにイメージするのだなあという発見もあります。楽しみながら彼我の文化の相違などもわかってきて、英語圏の人の考えや生活の様子や文化の実態がうかがえるという効用もあるのです。」<sup>12)</sup>

次に、『マザーグースのうた』全5集のイラストレーター堀内の言葉に注目してみたい。彼は、初めてマザーグースの挿絵を描きはじめた頃の心境を次のように語っている。

「映像によるコミュニケーションが普遍性を獲得していく反面、対象のうちに処理しつくせない影の部分の存在を知ることになります。デザインを含めて多様化の、これが契機とも思えますが、イラストレーションという認識の試み(私にはそう定義してみたくなるのです)が個人と暗い深淵との遭遇であるのを知るのは、マザー・グースのように、その部分というのがあまりにも重要で、深い時間によって隠されている場合でしょう。(中略)とにかく、この仕事はまるで暗い海峡を泳ぎ始めたような気分です。私の前を気持ちよさそうにモーターボートを飛ばしている、谷川俊太郎さんの明るく新鮮な訳詩に助けられて、初体験として誘発されるものに先ずは従うほかはないようです。」<sup>13)</sup>

堀内の言う処理しつくせない部分について、訳詩の谷川は、解釈しようとする、ああも言えるしこうも言えるような奥の深さがマザーグースの魅力のひとつだとして、「マザー・グースは読んでいていつまでもわからないものがあって、その残りの部分がすごく魅力的」<sup>14)</sup>と堀内とは対照的に語っている。絵は視覚に直接語りかけてくる世界であるが、詩が語る世界はもっと広く自由であるからかもしれない。

マザーグースを描く画家に関して、夏目は、「手法、扱い方、目的、対象において、80年代、90年代には、多彩なマザーグース絵本が生まれたが、挿絵画家が一度は描いてみたい題材であるマザーグースは、同時に、画家の力量をはつきりと映し出してしまう題材でもある。」<sup>15)</sup>と画家の力量が問われるマザーグースの奥深さを述べている。また、三宅は、「現代も、力量のある画家は必ずといってよいほど伝承童謡の絵本を出版するが、それは、幼いころ刻印されたイメージを自分のオリジナリティーを加えて再創造することに意欲をもやすからに他ならない。」<sup>16)</sup>と述べている。谷川のいう「マザーグースが英語国民の感受性の深いところを形成している」からこそ、画家はオリジナリティーを加えた再創造への意欲を湧かすのであろう。そう考えると、マザーグースの世界で育っていない堀内が、前述のような苦悩のなかでマザーグースを描きはじめていったことが理解できる。堀内の挿絵に、マザーグースの唄ひとつひとつと深く向き合って描いたであろう誠実さを感じるのは、そのせいだろうか。

世界的な絵本作家センダックは、マザーグースには目に見える以上の何かがあり、とらえがたい性質となって挿絵をつけることがむずかしいと次のように説明している。

「第一に、そこには一種のそっけなさがあって、それに欺かれた軽はずみな画家は陳腐なものを描いてしまうことになります。次なるむずかしさは、デ・ラ・メアが「内なる目を喜ばせる」と形容した性質に関係しています。最上の想像力の産物の常として、それらは独自のイメージを喚起す

るので、画家は詩人マザーグースばかりかイラストレーターであるマザーグースとも格闘しなければならぬという、困った状況におこまれてしまうのです。(中略) 歌の全体が絵の中にちゃんとはいっていないければ、その画家はマザーグースを描くことに失敗したということになるのです。しかも、彼女のしっぺ返しは敏速です。知っているかぎり、これほど容赦なくイラストレーターの力量の有無をあばいてみせるものはほかにありません。」<sup>17)</sup>

この世界的な絵本作家の言葉によって堀内のマザーグースとの闘いがいかばかりであったかを察することができる。

また、洋書のマザーグース絵本は、英語が読めなくても挿絵を見ているだけで十分に楽しむことができるが、それは、力量ある多くの画家によって創り出された魅力に支えられているのである。この点でも、唄を楽しみ、力量ある多くの画家のイラストを目にして表現の多様性を感じとることができるマザーグースの教材としての有効性が認められるのである。

画家たちが想像してイメージを喚起するように、マザーグースと遊ぶ子どもたちも空想の世界を楽しんでいるように思う。特に不思議でナンセンスな唄は自由奔放に空想の世界で遊ぶことができる。まさにマザーグースならではの魅力といえる。

## 2. (3) 解放と共感をもたらすマザーグース

解放と共感とは、『保育学研究』第36巻第1号に「子どもの音楽表現にみられる解放と共感」を発表以来、筆者の実践におけるキーワードとなっている。「子どもたちが音楽表現を繰り返す様子を見ていると、瞳がきらきらと輝き出したり、楽しそうな仕草にリズムカルな躍動感が加わってくる時があつて、そこには、子どもたちの心身共に解放されている様子共感の喜びを感じている様子がうかがえたのである。」<sup>18)</sup>そして、小論では、子どもたちの心を解放し共感できる教材のひとつとして「マザー・グースのうた」による活動6事例を示している。<sup>19)</sup>

センダックは<sup>20)</sup>、絵を描くときにはいつも音楽を聴きながら子どもの時のファンタジーの世界を再び活性化させると述べて、子どもと音楽について次のように語っている。

「音楽にはファンタジーを解き放つという独特な力がありますが、私は昔からそれに魅了されてきました。(中略) 子どもならだれでも、不思議さがどんな音をしているか、(中略)あるいは悲しみが普通どんな音をしているか、ちゃんとしてしているようです。こうした音楽の助けによって、空想のひとつひとつが豊かになるのだということを、私は信じて疑いません。思わず歌いだしたり踊りだしたりしてしまうことは、子どもにとってはごくあたりまえで本能的なことであるようです。これはあるいは、表現しえないことをできるだけうまく表現する、子どもたちなりの手段なのかもしれません。空想や感情は言語より深いところに—子どもが使うことのできる言葉よりずっと奥に一ひそんでいて、どちらも深く深い肉体的な表現、音楽のように原始的な表現を要求するのです。」<sup>21)</sup>

センダックのこの言葉は、マザーグースと遊ぶ子どもの様子そのものである。子どもたちは空想の世界で遊ぶとき心が解放され、言葉より深いところで共感しているのであろう。

### 3. 授業での展開

#### 3. (1) 科目「子どもと表現Ⅰ」のねらいとマザーグース

「子どもと表現Ⅰ」の授業のねらいは<sup>22)</sup>、領域「表現」が豊かな感性を育て表現する意欲を養い創造性を豊かにする観点から示されていることを踏まえて、学生自身が表現の楽しさを実感して「子どもと共感できる保育者」を目指しながら保育者としての役割と援助について学ぶことに置いている。

授業の内容は、上記のねらいが有効に達成できるように、テキストによる理論に加え、実践例を教材として用いている。事例は筆者自身の実践なので、子どもたちの様子も併せて紹介している。このことは、学生が楽しさを実感しながら子どもの様子もイメージできるので、「子どもと共感できる保育者」としての学びに有効であると考えている。

マザーグースを授業の教材として活用しているのは、「子どもと共感できる保育者」を目指す学生に対して、本稿2. で述べた教材としてのマザーグースの効果が、大きく影響を与えると考えたからである。科目「子どもと表現Ⅰ」は、1回2時間・15回(30時間)の時間割で組まれている。内5回分9時間がマザーグースを活用して行っている授業である。

#### 3. (2) 授業でのアプローチ

まず、学生たちにマザーグースを知っているかどうかを尋ねると、手を上げるのは2, 3人で、マザーグースという名称だけは聞いたことがあるか全く知らない学生がほとんどである。授業は以下のように進めていく。

第1回：マザーグースを聴く—CDの音楽25曲

第2回：マザーグースを歌う—楽譜を配布

第3回：マザーグースを読む—絵本・文献等の閲覧

第4回：マザーグースを調べる—絵本・文献等の閲覧 レポートの項目を提示

第5回：マザーグースを楽しむ—絵本・文献等の閲覧 まとめ

以上が5回の大まかな内容だが、数多くあるマザーグースの唄のなかで、授業の教材として用いているのは日頃子どもたちが親しく遊んでいる中の25の唄である。

第1回は、CDから25曲を抜粋してダビングしたテープを聴くことから始める。マザーグースは口伝えの唄であるので、まず耳で聴くことから始めようとの意図からである。マザーグース独特の歌詞をより意識できるように、聴き取った歌詞をメモすることを課題とする。

第2回は、25曲の楽譜を見てピアノ伴奏で歌い、第1回目で聴き取れなかった歌詞の確認をする。一曲ごとに簡単な解説をして、1回か2回歌って2時間の授業時間を一杯使ってしまう。

第3回から第5回までは、筆者が収集したマザーグースの絵本、事典、研究書、楽譜、グッズ等130点ばかりを展示して、学生が自由に閲覧できるように教室の環境を設定して行う。そして、第1回で聴いたテープを繰り返し流して歌に親しめるよう配慮した。学生が、展示されている絵本等でマザーグースの幅広い表現の世界に触れ、自分が興味を持った唄や絵を調べてみることでマザーグースへの関心を深め、かつBGMの楽しい音楽を聴きながらマザーグースをより身近に感じて楽しめるようにとの環境設定である。第3回で一通り目を通し、第4回でいろいろ調べて

マザーグースへの関心を深め、第5回でマザーグースの魅力を楽しむという段階を予想して組み立てた。

学生は、この5回に亘り繰り返し25曲のマザーグースと触れるなかで、メロディーとリズムに心踊らせ、不思議でナンセンスな空想を楽しみ、多くの画家が描いた挿絵の数々から表現の多様性を知り、豊かで奥深いマザーグースの面白さを実感することができると考えた。

第1回「聴く」と第2回「歌う」の活動は一斉であるが、第3回からは、7ヶ所に設置した机の間を自由に閲覧する。机は、洋書の新本・洋書の古本・復刻版・日本語訳・事典研究書・楽譜とCD・グッズの種別で設置した。第3回でいろいろな絵や文献を「読み」、第4回で、自分が興味をもった唄を整理して「調べ」られるように、レポートの項目をプリントして配布した。その項目は下記のようなものである。なお、25曲には便宜上No.をつけておいた。

〈マザーグースの唄・レポート項目〉\*唄名については何曲あげてもよい。

1. 最初に楽譜を見ながら歌って楽しいと感じた唄：

①曲のNo.と唄名 ②楽しいと感じた要素(歌詞・メロディー・リズムなど)

2. 歌っているうちに想像が広がってきた唄： ①曲のNo.と唄名 ②そのイメージを表現する

3. マザーグースの本に描かれている絵に興味をもった唄： ①曲のNo.と唄名 ②興味をもった理由

4. 事典や解説書を読んで興味をもった唄： ①曲のNo.と唄名 ②興味をもった理由

5. CD(歌とオーケストラ演奏)を聴いて楽しいと感じた唄： ①曲のNo.と唄名

6. 口ずさめるようになった唄： ①曲のNo.と唄名

7. マザーグースのグッズをみて感じたこと

8. マザーグースの唄に対する興味は、どのように変化していったか

9. 歌う他に、子どもと一緒に遊べる唄： ①曲のNo.と唄名 ②遊び方(オリジナル・参考図書)

10. その他

以上がレポートの項目として示した内容である。学生がマザーグースに親しんでいく様子を把握するために、授業の進行に従って項目を並べてある。ただ、CDの項目に関しては、一番最初にCDを聴いたのは歌詞の読み取りが課題であったことと、第3回から第5回まではBGMとして繰り返し耳にしているので、5番目の項目とした。このレポートの項目は、学生がマザーグースに親しんでいく様子を把握する目的の他、学生が自分の興味を意識していくこと、そして、関心をもって教材研究を深めていく姿勢を養うことの3点をねらったものである。

#### 4. 学生の反応(レポートより)

マザーグースの授業内容終了後、レポートを提出した学生は103名であった。本項では、レポート結果に基づいて、学生がマザーグースをどのように捉えていったのかを考察していく。



「子どもと表現Ⅰ」におけるマザーグースの活用効果

4. (1) 項目1～6で挙げた唄

下記の表は、25の唄がレポートの項目1～6に挙げた数である。今回は学生の傾向を把握するため、各項目で全体の1割の10名以上が挙げた唄の順位を数字の左側に①②③で表記した。

	1. 最初に楽譜を見ながら歌って楽しいと感じた唄	2. 歌っているうちに想像が広がってきた唄	3. マザーグースの本のイラストに興味をもった唄	4. 事典や解説書を読んで興味をもった唄	5. CDを聴いて楽しいと感じた唄	6. 口ずさむようになった唄
1. 男の子って何でできてる	① 59	⑤ 23	3	8	④ 51	② 78
2. えっさかほいさ	⑤ 23	① 36	② 34	④ 12	⑧ 35	⑦ 44
3. マフェットのおじょうさん	3	③ 25	③ 31	③ 14	⑪ 11	⑪ 21
4. あつあつの豆のおかゆ	② 48	9	5	4	② 54	① 81
5. ジャックとジル	1	1	8	⑥ 10	2	1
6. ぺたぺたこねてよお菓子やさん	⑦ 21	④ 24	9	5	⑥ 44	③ 64
7. くわのまわりでまわろうよ	1		1	4	1	1
8. まるまるふとった息子のジョン	④ 26	② 29	⑤ 12	4	③ 53	③ 64
9. パンチとジュディ	9	⑧ 11	5	4	⑨ 31	⑨ 30
10. ひねくれ男がおりまして	③ 28	⑦ 12	8	1	① 59	⑧ 39
11. 靴のおうちのおばあさん		8	④ 20	④ 12	⑪ 11	8
12. があがあがちょうのおでした	⑤ 23	9	3	5	⑤ 49	⑤ 58
13. 女の子にあったかい	1				1	3
14. ちくたく	2	7	4	4	⑩ 13	⑭ 10
15. ちびのウイリー・ウィンキー	⑧ 18	⑥ 18	5	8	⑥ 44	⑥ 57
16. ちびっこジャック・ホーナー		2	5	6	1	2
17. 北風びゅうびゅうふいてます				4		1
18. ハンプティ・ダンプティ	1	9	① 63	② 34	7	4
19. この子豚さんかいものに	3	2	4		⑪ 11	⑬ 11
20. ワン・ツー・スリー・フォー・ファイブ			2		2	1
21. ロンドンばしがおこちる	5	1	4	① 35	⑭ 10	⑩ 27
22. メリーはこひつじかっていた	1		4	6	1	8
23. バンベリーのまちかどへ						1
24. 3匹のこねこ手袋なくして	7	2	2		⑭ 10	3
25. きらきらちいさなおほしさま	2	6	3		⑩ 11	⑫ 17

〈考察〉

項目1で楽譜を見て半数以上の学生が楽しいと感じた唄は、「男の子って何でできてる」の一曲だけであったが、項目6で半数以上が口ずさむようになった唄は6曲、1割以上口ずさむようになった唄は14曲であった。口ずさむようになるということは、自分のものとして楽しんでいられると考えられるが、学生が口ずさむようになった唄は、子どもたちにも人気のある唄と重なっている。また、CDの音楽を聴いて楽しいと感じた唄もほとんどが口ずさむようになっている。しかも、CDで40名以上に挙げられた唄は、ほとんどが10名から20名増で口ずさむようになっている。特に最初の楽譜の時から30名以上増で口ずさむようになった唄は、「あつあつの豆のおかゆ」「があがあがちょうのおでした」「ちびのウイリー・ウィンキー」「ぺたぺたこねてよお菓子やさん」「まるまるふとった息子のジョン」と5曲もある。項目1で一番人気の「男の子って

吉 田 若 葉

何でできてる」は、項目6では19名増の78名であり、「あつあつの豆のおかゆ」に次いで2位であった。いずれにしても上位を占めている唄は、歌詞がイメージしやすく親しめて、おもしろくリズムカルで歌いやすい唄である。項目によっては誰も挙げない唄もある。「バンベリーのまちかどへ」「くわのまわりでまわろうよ」「北風ぴゅうぴゅうふいてます」「女の子にあったかい」の4曲はあまり人気がなかった。子どもたちにとってはそうでもないのだが、学生にとってはイメージがわかず親しめなかったのだろうと思われる。以降、各項目別で見ていくこととする。

4. (2) 項目別の記述

各項目に挙げた理由等に関しては下記のような意見が記述されていた。記載は10名以上が挙げた唄である。なお、唄名のみを挙げた項目5と項目6については除いてある。

項目1 最初に楽譜を見ながら唄って楽しいと感じた唄：順位・人数・唄・楽しいと感じた要素

- 1位 (59) 男の子って何でできてる：・歌詞(発想)がおもしろい(54) ・メロディーに語りがはいる(30)  
 ・歌詞とメロディーが心地よく歌いやすい(25) ・イメージしやすい(8)
- 2位 (48) あつあつの豆のおかゆ：・歌詞が楽しい(27) ・九日たった豆のおかゆがおもしろい(21)  
 ・メロディーがリズムカルで歌いやすい(39)
- 3位 (28) ひねくれ男がおりまして：・ひねくれ歌詞がおもしろい(26) ・リズムがおもしろい(11)  
 ・ありえないことが不思議に感じない(1)
- 4位 (26) まるまるふとった息子のジョン：・歌詞を想像すると楽しい(27) ・メロディーが覚えやすい(13)
- 5位 (23) えっさかほいさ：・歌詞はユニークでおもしろい(21) ・6/8拍子が心地よく歌いやすい(16)  
 ・イメージしやすい(4)
- 5位 (23) があがあがちょうのおでました：・メロディーが歌いやすくリズムカル(16)  
 ・歌詞がおもしろい(20) ・歌詞にストーリーがある(4)
- 7位 (21) べたべたこねてよお菓子やさん：・歌詞が可愛らしく子どもの姿が浮かぶ(20)  
 ・6/8拍子のメロディーが優しく歌いやすい(8)
- 8位 (18) ちびのウイリー・ウィンキー：・軽やかなテンポとリズムで楽しく歌える(18)  
 ・ファンタジーの世界の情景が浮かぶ(4) ・振りを付けたくなる歌詞(2)

〈考察〉

どの唄に関しても、まず楽しいと感じるのは、「歌詞が面白く印象的」であって、「メロディーがリズムカルで歌いやすい」ことのようなのである。「イメージしやすい」も僅かだが挙げられていた。また、「ありえないことが不思議に感じない」とマザーグースの世界をうまく表現している記述もあった。

項目2 歌っているうちに想像が広がってきた唄：順位・人数・唄・どんなイメージか

\*絵( )とあるのは、絵を描いた人数である。

- 1位 (36) えっさかほいさ：・情景を説明(23) ・絵(11)
- 2位 (29) まるまるふとった息子のジョン：・寝ている男の子をイメージする(22) ・親の様子をイメージ(3)  
 ・絵(5)

## 「子どもと表現 I」におけるマザーグースの活用効果

- 3位 (25) マフェットのおじょうさん：・情景を説明 (14)・マフェットを想像 (3) ・絵 (7)
- 4位 (24) べたべたこねてよお菓子やさん：・情景を説明 (18) ・絵 (3)
- 5位 (23) 男の子って何でできてる：・かえる。かたつむり。お砂糖など(11) ・子どもをイメージする(6)  
・何もかもをイメージ (4) ・絵 (2)
- 6位 (18) ちびのウイリー・ウィンキー：・ウイリー・ウィンキーの様子をイメージする (16) ・絵 (1)  
・いろいろな家を想像する (1)
- 7位 (12) ひねくれ男がおりました：・ひねくれを想像 (6) ・情景を説明 (2) ・絵 (2)
- 8位 (11) パンチとジュディ：・パイの取り合いをイメージする (9) ・絵 (2)

### 〈考察〉

マザーグースの唄のイメージを絵に描くことが大好きな子どもは多いが、学生で10名以上が絵に描いた唄は「えっさかほいさ」1曲だけであった。「ひねくれ男がおりました」でひねくれを想像したのを除けば、ほとんどが具体的な言葉から想像して言葉で説明するものであった。

### 項目3 マザーグースの本に描かれている絵に興味をもった唄：順位・人数・興味をもった理由

- 1位 (63) ハンプティ・ダンプティ：・沢山の画家が描いていていろいろな表現がある (30)  
・手足のあるハンプティやハンプティの顔 (28)  
・卵だった (18)・落ちる様子や割れ方 (26)  
・いろいろな本の中に出てくる (15)
- 2位 (36) えっさかほいさ：・沢山の画家が描いていて表現が様々 (7)・ユーモラスな絵が多い (7)  
・月と牛の表現 (7)・お皿とスプーンの表現 (6)  
・擬人化して描いているのが多い (4)  
・いろいろなシチュエーションがある (9)  
・いろいろな本の一部に載っている (1)
- 3位 (31) マフェットのおじょうさん：・クモの表現 (14)・マフェットの表情 (15)  
・マフェットとクモの関係 (6)  
・おやつを食べている場所 (4)・いろいろなお話に登場してくる (2)
- 4位 (20) 靴のおうちのおばあさん：・にぎやかな子どもの数と様子 (10)・大変なおばあさんの様子 (10)  
・いろいろな靴の家 (8)
- 5位 (12) まるまるふとった息子のジョン：・太った男の子が少ない (11)

### 〈考察〉

学生たちが挙げた唄は、ほとんどのマザーグースの本に描かれている唄ばかりであった。一つの唄を題材として、数多くの画家がそれぞれのイメージで描いているので、興味深く比較をしながら表現の豊かさを楽しむことができたようである。

吉 田 若 葉

項目4 事典や解説書を読んで興味をもった唄：順位・人数・興味をもった理由

- 1位 (63) ロンドンばしがおこちる：・ロンドン橋の歴史 (31)・いろいろな歌詞がある (1)
- 2位 (34) ハンプティ・ダンプティ：・マザーグースの代表的キャラクター (6)・なぞなぞである (9)  
・卵 (9)・アリスの卵男 (2)・ずんぐりむっくりな人 (5)  
・取り返しがつかないことを意味する (13)・転落と破滅がテーマ (3)  
・新聞記事。マンガ映画にも多く使われる (4)・モデル実在説 (2)
- 3位 (14) マフェットのおじょうさん：・お菓子はヨーグルト (5)  
・時代により小さな蜘蛛から大きな蜘蛛に変わった (2)  
・モデルが実在説や由来にもいろいろな説がある (4)
- 4位 (12) えっさかほいさ：・お皿とスプーンの駆け落ち (3)・マザーグースの唄には欠かせない (2)  
・200年以上も愛唱され続けている (1)  
・英語のナンセンスな駄洒落的言葉遊び (1)  
・どんな事でも起こりうる想像の世界 (1)・すべてにモデルがいる (1)
- 4位 (12) 靴のおうちのおばあさん：・靴と子沢山は幸せを意味する (4)・多産のシンボル (4)
- 6位 (10) ジャックとジル：・神話説 (4)・水汲みに丘を登る不可解さ (2)  
・唄に続いてストーリーがある (1)

〈考察〉

事典や解説書に書かれている唄の背景や伝説を読んで、改めてマザーグースの歴史を感じ興味  
が深まった学生もいる。特にモデル実在説や歌詞には表現されていない意味や背景に興味をもつ  
ている。しかし、この興味は、必ずしも口ずさむまでの楽しさとは結びついていない。

項目7 マザーグースのグッズを見て感じたこと

(展示してあるグッズ全体を見ての感想)

- ・いろいろなグッズがあるので驚いた・世界中の大人にも子どもにも広く親しまれていることを実感
- ・マザーグースを身近なのだと感じた・自分も探したい
- ・いろいろな方法で表現してあって楽しめる・人の心を和ませる温かな雰囲気がある
- ・唄の雰囲気をつかむことができた・唄が思い出されて楽しい

(特定のグッズにたいしての感想)

- ・ハンプティ・ダンプティ：・グッズがとても多い・ポピュラーなキャラクターなのだろう・集めたくなった  
・お店で見たことがあった・いろいろな表情の顔があって興味深い
- ・この子豚さん かいものに：・布絵本がよくできている、手触りを楽しめた・布絵本を自分でも作りたい
- ・えっさかほいさ：・手袋の教材が面白い・布絵本が面白い・グッズが多い・欲しくなった
- ・パンチとジュディ：・Tシャツ・帽子・バッジなどいろいろあるのに驚いた  
・愛嬌があって引き付けられる  
・イギリスへ行って看板を見てみたい

〈考察〉

たくさんのグッズをみて驚き、マザーグースが多くの人々に親しまれていることを実感したよ

うである。マザーグースを身近に感じ自分も集めたいと思う学生も多くいた。自分でも作ってみたいという意欲的な学生もいた。

#### 項目8 マザーグースの唄に対する興味の変化：( )は人数

(マザーグースを授業ではじめた時)

- ・不思議でよくわからなかった (20) ・こんなものもあるのかといった程度で興味がなかった (15)
- ・ただの子どもの歌くらいに思っていた (3) ・マザーグースという言葉だけは知っていたが何かを知らなかった (8)
- ・たくさんの唄があって大変だと思った (1) ・リズムや歌詞が変わっていて変な唄だと思った (13)
- ・耳慣れない音楽が新鮮で面白いと感じた (9) ・家にビデオがあった (2) ・子どもの頃絵本を持っていた (3)

(興味の変化)

- ・もっとマザーグースを知りたくなった (38) ・いつの間にか興味関心が高まった (20)
- ・子どもと一緒に楽しみたい (21)
- ・知識をふやすことで興味のない歌も好きになった (1) ・いつの間にかマザーグースの世界に引き込まれていた (10)
- ・いろいろな表現があってももしろい (5) ・北原白秋の表現そのものだと思った (1) ・知らない人に教えてあげた (1)

曲や歌詞について

- ・ナンセンスなところが面白く楽しい (4) ・歌詞が不思議で面白い (13)
- ・自由に想像できて楽しい (24) ・想像して絵を描いて楽しかった (1)
- ・いつの間にか口ずさむようになった (35) ・マザーグースを歌うことが一つの楽しみになっていた (1)
- ・自分のために歌える歌 (1) ・歌えば歌うほど、どんどん好きになっていく (6) ・唄が頭から離れなくなった (11)
- ・曲がリズムカルで楽しい (9) ・CDを聴いて自然と歌をおぼえた (8) ・歌いながら体が揺れている (1)
- ・ピアノで弾けるようになりたい (2)

グッズについて

- ・グッズを探すようになった (8)

絵本に関して

- ・さまざまな表現があり興味が増した (11) ・絵というものに興味をもつようになった (1)
- ・絵本でイメージが深まった (8) ・絵本の絵から唄の特徴や曲を感じた (1)

解説に関して

- ・理解を深め興味を増した (21) ・マザーグースの本の多さに驚いた (4)
- ・解説をよんでマザーグースの奥の深さを知った (8)

#### 〈考察〉

この興味の変化の項目は、本稿のテーマにとって最も注目すべきところである。最初はほとんどの学生が興味や関心をもっていなかったようだが、はじめて唄を耳にして、不思議でよくわからないという学生が20名、変な唄だと思った学生も含めれば33名もいた。筆者が幼稚園教員対象の講習会でマザーグースを紹介した時も同様の反応があった。おそらく日頃歌っている歌のどのジャンルにも入らなかったのであろう。しかし、耳慣れない音楽が新鮮で面白いと感じた学生もいた。

そして、最初のうちは違和感のあった唄が、いつの間にか興味関心が高まり、いつの間にかマ

ザーグースの世界に引き込まれ、いつの間にか口ずさむようになっていったようである。興味の変化に対して学生たちの多くが表現した言葉は、「いつの間にか」「面白い」「楽しい」「想像できる」「もっと知りたい」であった。ここで特記すべきは、「子どもと一緒に楽しみたい」と思った学生が多くいたことである。学んだことは活かされてこそ意味のあるものとなる。子どもへの思いをもって学んでいることは、保育学科の学生として大変望ましい姿である。

#### 項目9 歌う他に、子どもと一緒に遊べる唄

この項目に関しては、本に記載されている遊びを参考にした記述が多かったが、中には、ペーパーサートの製作や、イメージを絵に描いて遊ぶという記述もあった。マザーグースには歌いながら手遊びをする唄が多いが、オリジナルの手遊びを考えた学生もいた。

#### 項目10 その他

その他の項目に記述の内容については、学生のマザーグースの唄に対する熱い思いを感じることができた。記述内容は、だいたい(マザーグースへの興味関心)(マザーグースと表現)(マザーグースを通して得た共感)に分けられた。

##### (マザーグースへの興味関心)

- ・歌の歌詞に興味を持つようになった。
- ・自分の中で、マザーグースへの興味がどんどん変化していくのがわかった。
- ・何度聴いても、また聴きたくなる。 ・一度聞いたら忘れられない心地よさがある。
- ・こんなに不思議な唄を聴いたのは初めてだった。一つ一つの唄がおもしろく不思議で何とも言えない感じ。
- ・古さを感じないところがすばらしい。
- ・家でテレビを見ていたら「おまえサンタクロース信じてるのかよ、ハンプティ・ダンプティ信じているのかよ」と主人公の台詞があって驚いた。一緒に見ていた人に説明した。
- ・本を見ていてハンプティ・ダンプティを見つけると少しテンションがあがる
- ・絵本やグッズを集めたい。

##### (マザーグースと表現)

- ・子どもになったような気持ちで取り組めた。
- ・マザーグースの唄を歌っていると自然と元気が出てきて楽しい気分になり、マザーグースが持つパワーを感じる。
- ・マザーグースの唄に出会えて、自分の表現を出せるようになったし心から楽しめた。
- ・歌う時にリズムや音程を間違わずに歌うことよりも、想像して歌っていた。
- ・唄を聴いて次々と想像ができる体験をしたのは初めてだった。
- ・カラオケにはいつか見て歌ってみたい

##### (マザーグースを通して得た共感)

- ・世界中の人々がマザーグースを通して共感したり意見を述べており、人の興味を引くマザーグースの力に感動した。
- ・またみんなで歌いたい。

## 「子どもと表現Ⅰ」におけるマザーグースの活用効果

- ・授業中、CDを聴きながら本を調べていた時に、何人かが口ずさんでしまうと、一気にみんな歌っていることに気付いた。
- ・みんなが話をしながらマザーグースのほんを調べていた時、「マフェットのおじょうさん」が流れると、口数が減り静かになった。曲によって、みんなそれぞれに想像しているのだろうと思った。

### 〈考察〉

その他の項目には、マザーグースが大好きになった学生たちの思いが記述されていた。「こんなに不思議な唄を聴いたのは初めてだ」「新鮮で心地よくて何度聴いてもまた聴きたくなる」とマザーグース独特の唄の魅力を記述している。子どもたちは、知っているマザーグースの唄や絵を発見するととても喜び興奮するが、学生も同様に「発見の喜び」を体験している。マザーグースと表現については、「自然と元気が出てきて楽しい気分になりマザーグースが持つパワーを感じる」という記述や「子どもになったような気持ちで取り組めた」「自分の表現を出せるようになって心から楽しめた」とマザーグースによって解放された様子を記述している。また、「次々と想像できる体験ははじめてだ」と想像を引き出してくれるマザーグースについても記述している。そして、マザーグースをみんなで口ずさんで味わった共感の喜びが記述されていた。子ども同様、学生もマザーグースによって解放と共感を味わうことができたようである。

## 5. おわりに

本稿は、筆者の研究テーマである「創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫」の報告第3稿として「子どもと表現Ⅰ」において谷川俊太郎のマザーグースを教材として活用した事例から、授業の効果を検証してきた。

谷川俊太郎のマザーグースは、訳詩と絵と音楽(CD)で表現されているので、詩が「心にすつと入ってくる」ことと「言葉と絵と音楽で織りなされた唄」であることの二つの理由から教材として導入した。本稿2「教材としてのマザーグース」においては、谷川俊太郎のマザーグースの、教材としての魅力を考察してきた。谷川が「口にすると楽しくて耳で聞いても楽しい」日本語訳を心がけたことで、リズムカルな言葉を口ずさむことができる。口伝えのマザーグースの性質を大切に音楽は、表現豊かで多様性をもっており、飽きることなく体ぐるみで楽しむことができる。人間のリアリティをもち不思議でナンセンスな唄は、自由奔放な空想の世界を引き出し解放と共感をもたらす。谷川俊太郎のマザーグースの他、数多くの画家が描いた多彩なイラストは、想像する楽しさと表現の多様性を感じさせてくれる。

このように深く幅広い魅力をもつマザーグースは、まさに豊かな感性を育む教材であるといえる。このことは、学生のレポートからも明確に読み取ることができた。マザーグースを活用した授業において、学生たちは、楽しさを実感しながら様々な表現の多様性を学ぶことができた。この学びが、多様な子どもの表現を受けとめ、子どもの表現に共感できる保育者を育てることに繋がるかと考えている。マザーグースの世界は、創造性豊かな保育者を目指す学生一人ひとりの感性にさまざまなかたちで影響を与えていたが、今後も工夫を重ねマザーグースを活用していこうと考えている。

註

- 1) 平野敬一『MOE 特別企画マザーグース』白泉社 1992年 p.8
- 2) 谷川俊太郎訳『マザー・グースのうた』草思社 1975年あとがき
- 3) 谷川俊太郎『谷川俊太郎訳詩によるマザー・グースのうた\*第1集』キングレコード株式会社 1976年 LP  
レコード解説
- 4) 谷川俊太郎『MOE 特別企画マザーグース』白泉社 1992年 P.22
- 5) 大町正人『谷川俊太郎訳詩によるマザー・グースのうた①』キングレコード 1995年 CD 解説 p.2
- 6) 谷川俊太郎『MOE 特別企画マザーグース』白泉社 1992年 p.2 3
- 7) 大町正人『谷川俊太郎訳詩によるマザー・グースのうた①』キングレコード 1995年 CD 解説 p.3
- 8) 平野敬一『谷川俊太郎訳詩によるマザー・グースのうた②』キングレコード 1995年 CD 解説 p.3
- 9) 大町正人『マザー・グースのうた別巻マザー・グースのうたのほん』草思社 1997年 p.116
- 10) 井田俊隆『マザーグースを遊ぶ 子どもの素顔と家族の光景』本の友社 2005年 p. 1
- 11) 谷川俊太郎『MOE 特別企画マザーグース』白泉社 1992年 p.2 3
- 12) 吉田新一『絵本/物語るイラストレーション』日本エディタースクール出版部 1999年 p.144
- 13) 堀内誠一『鷲津名都江監修 マザー・グースをくちずさんで』求龍堂 1995年 p.88
- 14) 谷川俊太郎『MOE 特別企画マザーグース』白泉社 1992年 p.22
- 15) 夏目康子『マザーグースと絵本の世界』岩崎美術社 1999年 p.187
- 16) 三宅興子『イギリスの絵本の歴史』岩崎美術社 1995年 p.77
- 17) モーリス・センダック 協明子・島多代訳『センダックの絵本論』岩波書店 1990年 p.14
- 18) 吉田若葉「子どもの音楽表現にみられる解放と共感」『保育学研究』第36巻第1号 平成10年 p.67-68
- 19) 吉田若葉「子どもの音楽表現にみられる解放と共感」『保育学研究』第36巻第1号 平成10年 p.71-73
- 20) モーリス・センダック 協明子・島多代訳『センダックの絵本論』岩波書店 1990年 p.4
- 21) モーリス・センダック 協明子・島多代訳『センダックの絵本論』岩波書店 1990年 p.4-5
- 22) 「子どもと表現Ⅰ」『教授要目』北陸学院短期大学 2006年度 p.57